

はじめに

「生活健康科学概論」は、生活環境コースおよび健康スポーツコースの1回生にとって必修科目である。しかしこのたびの課程の再編に伴い、この講義はカリキュラムから姿を消すことになった。したがって、2007年度後学期の受講生49名が最後の授業となる。

本報告では、授業の総括リポートを考察することで学生による評価を行うと同時に、入門期の授業づくりのあり方を検討する。

1 ともに育ちあう授業づくり

「この講義では、教師になりたいと考える私にとって将来的に必要となる知識や心に残るもの、様々な感情を感じることができました。それは、大学生活では学ぶことが難しい学びがあったと感じています。

この授業において互いに学び合える学習がありました。その1つとしてプリントの資料を朗読する場面が多くありました。2つ目として、前で発表する機会がありました。私自身は朗読や発表など人に伝える行為を苦手としていました。なので、朗読の順番が回ってこないか不安になったり、発表の前には少し憂鬱になっていました。しかし、全員の前で発表することで、表現力を少し身に付けることができ苦手意識を少しだけ克服することができたと感じています。また、グループ活動があり、お互いに学べる素晴らしさと共に、仲間の大切さを感じることができました。つまり学びだけでなく、自分の苦手を克服する事ができ、仲間意識を高めることができた授業と感じています。」(沙織)

この学生が指摘してくれたように、生きる

力には表現力と仲間の力が不可欠と考える私は、様々な授業づくりの工夫を試みてきた。たとえば、オリエンテーション(第1回)では、座席をコの字形にして一分間スピーチを行った。出身高校や部活動について語ることの多い自己紹介ではなく、「出身小学校と好きな言葉」を織りこんでスピーチしてもらった。この試みによってクラスメートの新しい一面を知ったようである。

「この授業の始まりは、普段教授からの一方通行で受け身な授業ばかりに慣れてしまっている我々にとって、あまりに衝撃的なものであった。机はカタカナの『コ』の字に動かされ、まるでこれから討論でもするかのようにであった。そして始まった自己紹介。出身小学校を発表するというマキオ・スタイル。度肝を抜かれた、と共になんで?という疑問も生じた。しかし、今となれば笑い話でありふれたものから、一人ひとりの本質が知れたように思う。また、それぞれの土地に対する先生のコメントには脱帽であった。知識の深さと教養の広さがうかがえた。どうすれば自分もこのようになれるか。そう考えた時に、全ての経験、考えが無駄にならないということに行き着いた。私自身、将来教員を目指す上で、知識・教養が必要とされる。しかし、その前に一人の人間としても日々学び、成長していきたいと思う。」(勝彦)

大学1回生という入門期にあって、どのような授業づくりをすればよいか。その答えは授業の感想文にある。このように考える私は「書くことは考えること」という信念の下、感想文を重視して授業づくりを行ってきた。

次に、学生たちがもっとも印象深かったと評価したグループ研究とその発表に言及しよう。

2 「サザエさん」のグループ研究とその発表

今年度は、受講生を9つのグループに分けてマンガ「サザエさん研究」を行い、各グループが発表した。戦後の混乱期から石油ショックまでの庶民の生活史分析は、学生の圧倒的支持を受けており、指導法のあり方をも考えさせてくれる。レポートの中から印象的な記述を引用したい。

「サザエさんの研究で、私が一番に感じたのが人とのつながりである。

例えば、商店街について。今、スーパーマーケットのように、そこに行くとも何でも手に入るような店が多く作られている。しかし、そこには商店街のように、一軒一軒小さいが品物別のお店があり、従業員さんと仲良く会話できるような空間は無い。ただ欲しい物を選びかごに入れ、レジまで持っていくというような機械的な行動をする場である。しかし、商店街の中にある店は、すべてがそうだとはいえないが、従業員の人が親切に接客をしてくれて、いろいろな話もきかせてくれる。皆は便利さを追求するあまり、なんでも一気に買えるスーパーマーケットに行ってしまう。そのために、人とのつながりが持てる空間が、また消えようとしている。このように便利さを追求するあまり、私たちは人と接する場を失っていないのだろうか。

今、私の地元の商店街では、復興をはかろうと、土曜日などを行っている。そこでは、手作りの小物などを置いて地元の人々と触れ合おうとしている商店街の人の努力が見られた。このような大切な場を失わないためにも、私たちが支えていかなければいけないのだなあと感じました。」(大頭)

以上のように、グループによる「サザエ

さん研究」を通して、地域の暮らしを見つめる学生も出てきた。いのちと暮らしと生き方を切り結んで考えることが出来るようになる。これが到達目標の一つである。

3 人間の尊厳への自覚

「生活健康科学概論」の受講者の中には、自らのけがの体験を通して「健康な時に、健康の価値の大事さに気づくこと」が出来た者や、公害と差別との関係についても気づいてくれる者が出てきた。そのレポートの一部を紹介しよう。まず、健康の価値について。

「私は、健康であるためには、健康な時に『健康の価値』に気づくことが大切であると考える。誰もが健康でありたいと願っているが、それは自分自身が病気になったり、けがをしてから初めて、行動が伴った決意になっていると思う。しかし、それでは残念ながら手遅れになることもある。いつも健康であるためには、日々の暮らしの中で健康な生活を積み重ねることが大切だ。健康な時に、健康の価値の偉大さに気付くべきだ。」(由美絵)

こうした学ぶ意欲にあふれるレポートに数多く触れることが出来たのは、担当者として幸せであった。

おわりに

本報告で明らかになったのは、①世界の広がり、②仲間のつながり、③新しい自分の発見という学ぶよろこびであった。それは競争原理ではなく、共育のよろこびを体験する中でこそ育つものである、ということに確信が持てたことである。

こうした受講者の学ぶよろこびの声は、教える者が教えられるの言葉通り、私のエネルギー源になっている。さらなる一步を刻みたいと考えている。